

称号及び氏名	博士（言語文化学）	永吉 寿子
学位授与の日付	平成21年3月31日	
論文名	太宰治における〈倫理〉の問題	
論文審査委員	主査	山崎 正純
	副査	竹下 豊
	副査	河合 眞澄

論文要旨

本論文は、太宰治の戦時下から戦後にかけての作品を対象に、作品に内在する倫理性を明らかにすることを目的とする。戦時下から戦後にかけての諸作品は、太宰治にとってきわめて重要な課題が連続的に考究されている。たとえば、戦時下に書かれた『右大臣実朝』（錦城出版社、一九四三年九月）や『お伽草紙』（筑摩書房、一九四五年一〇月）は作中作家の倫理的ポジション（対読者意識）が作品の重要な構成要素となっており、作者と読者との関係性にきわめて重要な問いを投げかけている。すなわち作者の叙述を読むことを通して、読者の倫理的ポジションが問われるということである。こうした問いの答えは、作者が一定の挿話として明示しているものではなく、読者が自己の力でつかみとらなければならないものなのである。なぜなら、太宰の作品には、他者をどこまでも他者たらしむべく相対化する倫理的な態度がその基底にあるからだ。太宰はこうした認識を保持していたという点で、倫理的な作家であったといえるだろう。その倫理的な特質を、以下の各章において検証する予定である。

第I部「〈読む〉ことの倫理性」において、読者に求められる倫理的ポジションについて考察する。

第I部第一章「『右大臣実朝』における〈回想〉と〈引用〉」では、従来から看過されてきた読者に強いられる読みのプロセス、すなわち同一人物（実朝）が異なった複数の視点から描き出されるがゆえに、そうした叙述の異なりを整序しなければならないという点に注目する。読者は、本編にあたる「私」の回想部分と、その典拠である史料の引用部分とを同時並行的に読み進めることで、実朝とはいかなる人物であるのかという問いに直面する。こうし

た問いは、読者に対象（実朝）を絶えず捉えなおす主体性を要求する。このように構成される『右大臣実朝』というテキストは、一元的歴史観ではなく多元的な歴史の物語であるということ、さらにこの物語が選択・排除の行為を通して引用・構成されていることを明らかにした。これにより、引用する〈作者〉が他者（読者）に向かって倫理的ポジションを要請する歴史叙述者であることを指摘した。

第Ⅰ部第二章『お伽草紙』における語りの諸相—『父』から〈作家〉へ—では、家父長制に支えられた構図に位置する〈父〉という語り手が、いかにして〈私〉や〈作家〉といった主体へと変容するのかについて考察する。テキスト冒頭の抑圧排他的な構図から様々に展開される四つの物語が、家父長制や男性的権威の構図そのものを切り崩してゆき、語り手が読者に対して従来のお伽噺の読みとは異なる別の（個人的な）読みを促してゆく過程を明らかにした。

以上のような読者意識にまつわる問題は、戦後の諸作品に引き継がれてゆき、敗戦期特有の課題と重なり合い、女語り・戯曲・短編など様々なジャンルの諸作品に描き出されていくのだと考えられる。

第Ⅰ部第三章『春の枯葉』と占領下の〈学校〉表象では、戯曲に描き出された二人の教師の対照的な様相を考察する。その際、占領下におかれた教師が抱え込む矛盾を析出し、それが教師の主体を分裂させていることを明らかにした。敗戦後の空間を生きる教師の分裂した様相は、登場人物の死によって幕を閉じる「悲劇」として描き出されたわけだが、こうした作品の終結によっては完結しない主題を描き出すことで観客・読者に主体的な読みを引き受けさせるところに、太宰治のドラマトルギーの核心があることを指摘した。

次に、**第Ⅱ部「〈語る〉ことの倫理性」**において、戦後の女語りの作品「ヴィヨンの妻」『展望』一九四七年三月）と「斜陽」『新潮』一九四七年七月～一〇月）を検討することで、母の娘・夫の妻・子の母の言説が持ち得る批判性について考察し、つづいて、家庭小説の検討を通して〈父語り〉と倫理の問題について考察する。

第Ⅱ部第一章「編制される『私たち』の婚姻—『ヴィヨンの妻』論—では、戦後の法制度が編制されるなかで、そうしたいっさいの制度からこぼれおちる一対の男女とその子どもが、統一体となって連帯する様態を描き出した作品として位置付けられることを論証する。

第Ⅱ部第二章『斜陽』における〈破壊〉と〈犠牲〉では、戦時下の記憶に対する透徹した批判性を持つかず子の言説が、戦時下の言説の模倣とその差異を表出し、戦後民主主義という時代の大きな流れに対抗する試みであることを論証する。こうしたかず子の言説が、他者を取り込む暴力を排する原動力に支えられた新たな歴史を描き出そうとするものであることを指摘した。

第Ⅱ部第三章「欲望と正義—敗戦後の太宰治と知性の背理—では、戦後の家庭小説と女語りの作品との相補的な関係を、作品の重層的な語りの様相から分析する。家庭小説における〈父語り〉が、作中作家の“^{テスト}検証”への欲望によって自我像を創出していること、また、

ひとりの「父」である作中作家が、自己保全的なエゴイズムを克服する価値概念としての正義を表象することを明らかにした。一方、戦後の女語りには、〈妻（母）らしさ〉という役割を自ら放棄しても、生きる力としての言葉を手放さず、自らの苦しみを救いうる語りを決して失うことはない生命力があることを指摘した。

戦時下から戦後にかけて太宰治にとっての人生の画期となったのは、やはり父になることなのではなかっただろうか。子どもに絵本を読み聞かせる父の姿が差し挟まれた『お伽草紙』、戦後の短編「父」（『人間』一九四七年四月）や「桜桃」には、父としてのまなざしを子どもへと向けつづけている作家の姿がある。こうした父としてのまなざしを獲得したことで、作家としての倫理という問題が浮上してくる。たとえば、作家は〈父らしさ〉といった役割や秩序に埋没すれば、そのヒエラルキーの中に整序され、個としての〈私〉を抑圧される。それは作家としての死を意味するだろう。太宰が描いた作中作家たちは、〈父らしさ〉と個としての〈私〉というふたつの自我に引き裂かれてはいるが、そうした自我を否定するのではなく、そのまま背負い、両者のあいだを往還しながら物語を紡ぎ出す。こうした父と〈私〉という自我の相克こそ、作家として倫理を問うことなのだといえよう。

本論文は、以上の六章と巻頭の序とを合わせた全七章によって、太宰治の戦時下から戦後にかけての諸作品における倫理性の諸相を明らかにすることを目指したものである。

学位論文審査結果の要旨

本論文は、太宰治文学の諸作品に内在する倫理性について、習作から戦時下及び戦後にかけての作品分析を通して多角的に論じたものである。言語文化学専攻が定める学位請求資格の基準を十分に満たしており、予備審査及び本審査において厳正な審査を行った。以下、第Ⅰ部と第Ⅱ部に分けられた本編六章からなる本論文の構成に沿って、各章の要点と研究成果として評価されるべき点について具体的に述べることにしたい。

本編への導入として、序「〈犠牲〉という倫理 —習作『犠牲』論—」が置かれている。ここでは、善と悪についての倫理学、哲学上の議論を参照しながら、太宰作品に描かれた善と悪の特質についてまず考察し、太宰の作品史上もっとも早い段階で道徳的な問題が作品化された習作「犠牲」を取り上げ、善なる行為と自己愛とを厳しく峻別する太宰の倫理感覚を明らかにした。後の太宰作品の分析を行う本編へとつながる基礎部分であり、太宰治論としても倫理を視点とする非常にユニークな論述となっている。

第Ⅰ部「〈読む〉ことの倫理性」では、太宰治文学における〈倫理〉の問題をテキストとその読者との関係の中で考察するため、古典翻案ものといわれる作品『右大臣実朝』と『お伽草紙』、戦後の戯曲「春の枯葉」とを、第一章から第三章で取り扱う。

第一章『右大臣実朝』における〈回想〉と〈引用〉は、従来、太宰治の死生観の直

截的な表現として平板かつ一面的にしか評価されてこなかった実朝像に対し、語り手の回想部分と書き手の引用部分という多元的な視点から実朝が描き出されている点に注目する。テキストの詳細な分析によって浮かび上がるのは、読者に求められる多元的な読みのプロセスにはかならない。こうした読者の読みのプロセスの検証を通して、実朝像が読者の主体的な読みによって捉えなおされることを説いている。また、第二章『お伽草紙』における語りの諸相 — 「父」から〈作家〉へ — は、「父」、「私」、「作者」といったさまざまな呼称を用いる語り手の叙述が、読者に対して従来のお伽噺の受容のされ方とは異なる読みを促してゆく過程を考察している。古典翻案ものといわれる作品の分析を通して、依然として家父長制の中に生きる多くの読者が、作品の解釈行為を通じて家父長制を相対化していくプロセスが明らかにされていく。本論文は、これまで明確にされなかった作者と読者の関係性を、作品の語り手の一人称の変化を詳細にたどることで明らかにしたといえるであろう。つづけて、第三章『春の枯葉』と占領下の〈学校〉表象」は、敗戦期の国民学校教師が直面した教育における民主化の流れと、戦時下に彼ら教師が果たしてきた役割意識との大きな落差に注目する。戦前戦後の断絶と連続の双方をともに背負って生きることとなった敗戦国民（日本人）の倫理の混乱を見事に論証した論考である。またこの作品が戯曲であることにも考察を広げ、同時代の観客にこの倫理の混迷を突き付け、引き受けさせる作者太宰治のねらいを明らかにしている。

第Ⅱ部「〈語る〉ことの倫理性」では、生成する語りの構造に内在する語り手の倫理性を明らかにするため、戦後の女語りの作品（「ヴィヨンの妻」、「斜陽」）と家庭小説といわれる戦後短篇の諸作品（「桜桃」、「家庭の幸福」等）とを、第一章から第三章で取り扱う。

第一章「編制される「私たち」の婚姻 — 『ヴィヨンの妻』論 —」は、女性独白体と名付けられてきた語りによって成立する作品の中から、「私たち」という人称の複数性を表出する妻の語りの独自性に着目する。その語りの分析を通して、戦後の太宰が女性独白体の特質を巧みに操りながら、妻の言葉を通じて、倫理の根本にある〈共生〉の思想を表明した作品として「ヴィヨンの妻」を位置づけその意義を論じる。汗牛充棟の観を呈するこの作品の研究論文のなかにあって、新しい読みの可能性を切り拓いたものとして評価できる。また、第二章『斜陽』における〈破壊〉と〈犠牲〉は、「斜陽」の主人公かず子の言説を、戦時の状況を批判するものであると同時に、敗戦後の民主化の時代の大きな流れに対抗するものとして位置づけ、その語り内に内在する特異な倫理的立場を明らかにしている。戦後の太宰治の示す時代思潮との微妙なずれの意味を考察した論考であり、敗戦後の太宰を論じたものとして、研究史上に重要な位置を占めるものと評価できる。さらに、第三章「欲望と正義 — 敗戦後の太宰治と知性の背理 —」は、家庭小説における〈父語り〉と〈女語り〉との、位相の異なりに注目する。なかでも、家庭小説における〈父語り〉が、父という役割意識に対する違和感を、その感覚への後ろめたさとともに細かく分析的に叙述した語りであること、さらに、そうした語り、妻とし

での役割を放棄する戦後の〈女語り〉の作品と相補的な関係にあることを論じた分析は、太宰の語りが二つの極を含んで回転する橢円の渦のように、両極の間の緊張を含みつつ、ダイナミックに生成する語りであることを示唆するものとなっている。

以上述べてきたように、本論文は、太宰治の習作の分析を序とし、戦時下から戦後にかけての諸作品を〈倫理〉の観点から分析することに成功しているといえるであろう。従来、左翼思想からの転向体験を軸に展開されてきた太宰治の倫理性についての考察は、太宰治という一作家の生きた軌跡として論じられる傾向が顕著であった。永吉寿子氏は太宰治の〈倫理〉をめぐるこのような研究状況に対し、具体的な諸作品のテキストを丹念に読みこむ作業と、同時代の思潮と文学作品とをリンクさせる方法論の模索という地道な研究姿勢を堅持し、その成果であるこれら一連の論考によって、明らかに次の新たな研究段階へと踏み込み得たものと言ってよいと考えられる。

上述のように、本論文が太宰治文学研究に新たに付加した知見は、今後の研究の展開に裨益するところが大きい。審査委員会による慎重かつ厳正な審査の結果、本研究が博士（言語文化学）の学位に値するものと判断するものである。